



高槻 まちかど遺産 H25-7



御蔵屋敷跡

文禄年間(1592~95)、豊臣直轄領の米蔵として置かれたのが始まりといい、江戸時代になっても引き続き利用されました。当時の富田は、高槻市域で最も石高が多い村で、約3,000石のうち普門寺領200石を除く大部分が幕府領(天領)でした。のちに天領の一部は高槻藩領や旗本領に組み替えられますが、藩領はわずか34石余でした。蔵の管理には、豪商・紅屋を筆頭とする富田の有力層「十人衆」があたり、寄合所としても用いられたといえます。



江戸前期の富田 『高槻市史』より

平成 26 年 3 月 高槻市教育委員会

御蔵屋敷跡

文禄年間(1592~95)、豊臣直轄領の米蔵として置かれていたのが始まりといい、江戸時代になっても引き続き利用されました。

当時の富田は、高槻市域で最も石高が多い村で、約3,000石のうち普門寺領200石を除く大部分が幕府領(天領)でした。のちに天領の一部は高槻藩や旗本領に組み替えられますが、藩領はわずか34石余でした。

蔵の管理には、豪商・紅屋を筆頭とする富田の有力層「十人衆」があたり、寄合所としても用いられたといえます。 平成 26 年 3 月 高槻市教育委員会

※高槻城 永井飛騨守 36,000石の城です。江戸より百三里に当る。

富田の台地の下を流れる地下水は、ミネラルに富む酒造りに適したもので周辺地域の米は酒造好適米として有名でした。その創醸は15世紀にまで遡るとの説もあり、最盛期は江戸時代の初め頃と言われています。明暦年間(1655-58)には24軒もの造り酒屋が軒を連ね、8200石余の酒造高を誇っていました。

その中心的存在だったのが、十人衆と呼ばれる町衆組織のトップでもあった紅屋市郎右衛門です。

約70年前より昭和30年頃まで富田酒造所は、清鶴・国之长・宝雪・朝日西・富寿栄5棟ありました。

